

法隆寺の真実の解明

深澤 大輔*

(平成 22 年 10 月 29 日受理)

Clear the true making of HORYUJI

Daisuke FUKAZAWA*

It is difficult that to see the way of exploring the rearing of Horyuujii and the reconstruction after that to be proud of the history in 1400, the meaning or the purpose of the reorganization only through " the ones " such as the literature and the traces approaches the truth.It is important to pursue what need such " one " was made because there was through seeing a way of using those " ones " in those days and so on and to go.

The precincts and the building at Horyuujii are a stage, and a setting and property.The actor and the stagehand are priests in those days.However, for the drama to stand up, the manager is necessary, and it dies to that and needs a screenwriter.Then, to make an audience be moved when will be comic when the drama will be traged, the truth which touches in its own way and loyalty and heartstrings and the idea, the philosophy are necessary.

Horyuujii is the one which developed, being supported by the crown prince belief.Therefore, it let's be possible to say that it is sought for making the truth clear by understanding deeply about the ideal of the crown prince who is represented by the Jyu-Shichijo Constitution through the building in Toin and Saiin and the Buddhist image which is enshrined there and so on and interpreting.

Key words : Horyuujii, truth, way of using, stage, drama, Jyu-Shichijo Constitution, crown prince

1. はじめに

大学の社寺建築の伽藍配置の講義の中で、「法隆寺様式」について聴いたのは、大学 2 年の建築史の時間であった。その時は、法隆寺が古くて代表的な寺だからだろうと聞いていたが、後になって法隆寺にしかない様式らしいことを知った。また、その頃、法隆寺再建・非再建論争が明治から戦前まで続いていたことを知った。これについては、若草伽藍の発見と発掘により、再建されたことが判明した。しかしながら、豊田高専に赴任して暫く経った昭和 55 年頃、愛知県立芸術大学で法隆寺金堂が昭和 24 年に火災にあい、燃えたのでその障壁画の模写展が開催された。それを見て、法隆寺は聖徳太子を皇帝(天皇)と見倣して祀り、地上の浄土として創られた特別な寺であると考えられるようになった。また、未だ法隆寺には謎が多いとされ、様々な議論が続いている。そこで、本論文では、法隆寺の伽藍が造られ現在に至った経緯を辿り、真実に迫る方法について、考察を行って見たい。

* 建築学科教授 Department of Architecture and Engineering, Professor

2. 真実の追求の方法

法隆寺再建論争が明治 20(1887)年に起きてからこれまでに展開されて来た法隆寺の謎の解明の方法は、列挙すると、以下の如くとなる。

- ①文献史学：日本書記等にかかれていたことを根拠に事実関係を主張
- ②建築様式論：年代編年指標を整理する中で歴史的な成立の時期の前後を主張
- ③発掘調査：事実関係を発掘調査により物的証拠を挙げて証明
- ④年代検証：木材の年輪から伐採年を割り出し、使われた年代を推定
- ⑤哲学的思考：中門の中央に柱が立ち、仏像の顔が他の寺と違う等をヒントに推論
- ⑥建築史学：建物の建造年や改造年等を痕跡や編年指標から変遷過程を整理し推論

法隆寺の謎の解明は、これまで以上のように「物」に注目する方法で行われて来た。しかしながら、依然として法隆寺には謎が多いとされている。歴史的事実の一つである筈であるのに何故、謎とされる事が多いのであろうか。大学闘争が盛んになった昭和 45 年当時、「専門馬鹿」と大学教員が吊しあげられ、今後は「蛸壺的な研究」から「学際的な研究」に変えて行く必要があるとの主張がされたが、依然として「蛸壺的な研究」が主流で、主張する各自の立場からの主張に終始するため、決着がつかない。

以下、これまで明らかになって来たことを総合的に扱う「学際的な研究」の立場に立って推論を行って見たい。また、建築の計画を行う際に「生活と空間との対応」を標榜して来た立場から、法隆寺について見なおして見ることにしたい。つまり、これまで文献や建物、様式や痕跡、年代等、「物」に注目して考察が行われて来たが、「生活」、例えば行事や儀式、毎日のお勤めの変遷等を通しての考察は少ない。寺の境内と建物等は、そこで行われる儀式の舞台として造られており、僧侶やそれに参加する人々はその舞台上で演技を行う俳優である。また、古墳時代の後に仏教が伝来し、その後の永い斑鳩の里で展開された歴史の中で伝統や作法、仕来たり等が形成された。そして、そこで繰り広げられる演劇のシナリオは、各時代毎にそれらを踏まえて書かれたものと考えられる。従って、法隆寺の真実を探るためには、境内と建物で行われる儀式や仏事の行われ方を知る事が肝心である。法隆寺の場合、何よりも大切なことは、聖徳太子の理想を知り、それを支えて来た人々が各時代の状況の中で、各々の空間の場面展開をどのようにして図って来たか。その結果として、今ある建物が新設され、増改築され、取り壊されて来たかを知ることである。それを追求することが法隆寺の真実の追求に繋がるものと言えよう。

3. 法隆寺を取り巻く状況の変遷に関する年表

1400 年の歴史を持つ法隆寺についてその変遷について一々記述することは困難なので、これまでに分かっている聖徳太子並びに法隆寺建立やその後の変遷、主要な事柄について、その年代順にを列挙して見る。尚、()や：、⇒は著者が付記した内容である。

I. 太子の誕生以前期

5 世紀前半～半ば 仁徳天皇陵(大仙陵古墳)築造：墓域面積世界最大、前方後円墳：天

地合一=天=○+地=□

欽明 7(538)年 仏教伝来

Ⅱ. 太子の活躍期

6世紀後半 法隆寺の西方400mに藤ノ木古墳(円墳)築造：石室羨道⇒北東向

敏達 3(574)年 太子誕生

用明 2(587)年 用明天皇崩御、四天王寺発願(タテ型伽藍配置、北極星)：衆星共次

推古元(593)年 太子摂政となる。四天王寺造営開始

推古元(594)年 法隆寺の桧の八角形の塔の心柱材伐採

推古 7(599)年 地震あり、舎屋悉く破壊される。よって各地に地震神を祭らせる。

推古 9(601)年 太子、斑鳩宮造営

推古 12(604)年 太子、十七条憲法制定(17(天地合一：和)=9(天=○)+8(地=□))

推古 13(605)年 太子、斑鳩宮に移り住む

推古 14(606)年 太子、橘寺発願

推古 15(607)年 この頃金堂完成、若草伽藍(僧寺)完成(タテ型伽藍配置：南大門→中門→塔→金堂→講堂⇔北から20°西向き⇒生駒山)

太子、用明天皇奉為の薬師如来像造る

この頃、初期中宮寺(尼寺)が建立される

推古 30(622)年 創建法輪寺(三井寺)が太子の病氣平癒のため建立

太子、岡本宮を寺(法起寺)にすることを遺命：若草伽藍の北東、鬼門方向に位置する、北から20°西向き⇒生駒山向き

太子没(2月22日)⇒法会：若草伽藍の金堂？

Ⅲ. 法隆寺建立期

推古 31(623)年 金堂の釈迦三尊像(釈迦如来は太子の等身大)造る⇒法会：金堂？
後背銘文「往イテ浄土ニ登リ、早ク妙果ニ昇ラセタマワンコトヲ」

舒明 10(638)年 法起寺金堂、弥勒像を造る

皇極 2(643)年 斑鳩宮消失⇒山背大兄王とその一族、若草伽藍で自殺：上宮王家の殉教とも言える非業の集団死

法隆寺構想⇒ヨコ型伽藍配置、聖徳太子(=釈迦如来)を祀る地上の浄土、中軸線：北向き⇒石清水八幡の男山の西約1kmにある狩尾神社、直交軸線：西方向⇒教興寺、中軸線と松尾山(松尾寺)の南東の線と県道123号とが交わる付近で交差

大化 元(645)年 大化改新始まる

天智 8(669)年 金堂の天井板の伐採年杉667年と桧668年、金堂の工事開始：完成か？⇒法会：金堂？ 若草伽藍失火⇒放火か？

天智 9(670)年 若草伽藍被災：「一屋モ余ルコト無シ、大雨フリ、雷震ル」と伝る

天武 元(672)年 壬申の乱起こる：天皇の皇位継承争い

天武 2(673)年 法隆寺の五重塔の二層目の軒下の桧材伐採

再建法輪寺(三井寺)建立←法隆寺の2/3の規模、三重塔(心柱八角

- 形)の三層の柱間が2間：ヨコ型伽藍配置、但し金堂(東)・三重塔(西)と逆転⇒「この世」の形
- 天武 14(685)年 法起寺宝塔建立発願
- 持統 6(692)年 藤原宮造営(四神に叶い、三山鎮めと成す：耳成山⇒地震、畝傍山⇒水害、香具山⇒台風)
高松塚古墳・キトラ古墳(二段築成作りの円墳)、藤原京期に築造。
- 持統 13(699)年 中門の材伐採、この頃までに法隆寺の五重塔完成
- 慶雲 3(706)年 法起寺塔(心柱八角形、三層の柱間3間)の露盤あげられ、寺観整う：
ヨコ型伽藍配置、但し金堂(東)・三重塔(西)⇒「この世」の形
- 和銅 3(710)年 平城遷都
- 和銅 4(711)年 法隆寺完成⇒落成法要：法隆寺の金堂は東に位置し、釈迦如来像(中央)と薬師如来像(右・東)・阿弥陀如来像(左・西)に天蓋があり、東西三つ並び(オリオン座の三つ星、オリオン座は天の赤緯を通る)となっている。又、壁に描かれた釈迦如来像の上の傘の房は9本(=皇帝(天皇)に許された数)となっている。小壁20面に各2体の飛天が右周り(⇒天から地上の塔に飛来し金堂内を舞っている)している。五重塔は西に位置し、五層目の柱間は2間で、心柱は八角形(=掘っ立て柱)である。この金堂と塔の配置は、「あの世(=浄土)」の形。中門の中央に柱⇒落成法要の行われ方?⇒金堂と塔で法会、中門の西から入り回廊内に参列し、右回りし、東から出た?⇒参集者数は?

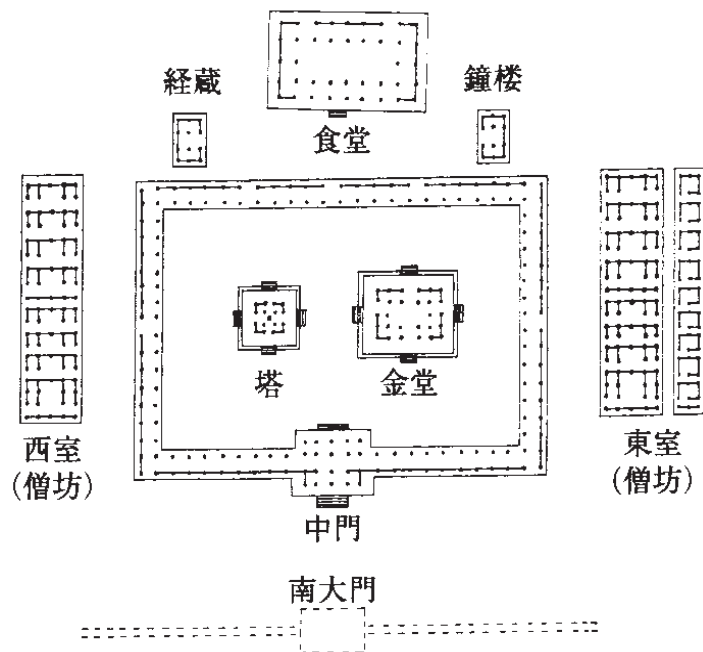


図1 法隆寺西院伽藍

出典：配置復元図 奈良六大寺図鑑 岩波書店

- 天平 8(736)年 太子の命日に金堂で法華經を講じられ、300 人余が参集した
- 天平 11(739)年 八角堂(夢殿=廟所、仏殿兼塔、二重基壇：飛鳥寺と同じ)を中心とする東院伽藍建立(斑鳩宮の旧地)⇒四天王寺式伽藍配置(不明門→礼堂→八角堂→伝法堂)：タテ型伽藍配置、北向き⇒天王山向き：東院と西院の中軸線は平行線、太子が 49 歳で亡くなる前 17 年間居住、八角堂⇒八方位の魔除け、内陣と外壁の各 8 本の柱は八角形
- 天平 20(748)年 八角堂(夢殿)完成⇒2 月 22 日、落成法要と太子の供養会=法華經等を講讀することを中心として、太子の遺徳を讃える法会。当時は、聖霊会とは呼ばなかった：堂の内で法会、基壇上の外側を周回？⇒金堂の裳階造られる？ 西院=浄土=あの世=見えない=秘儀の場？
- 勝宝 4(752)年 東大寺大仏開眼
- 延暦 13(794)年 平安遷都

IV. 太子信仰高揚期

- 延暦 17(798)年 法隆寺他 9 寺官寺となる
- 貞観 13(872)年 太子の二百五十年忌に上宮王院完成⇒落成法要？
- 延長 3(925)年 法隆寺講堂(食堂)・鐘樓・北室など焼失
- 正暦 元(990)年 法隆寺講堂・鐘樓再建される、この頃、回廊が凸形にされた

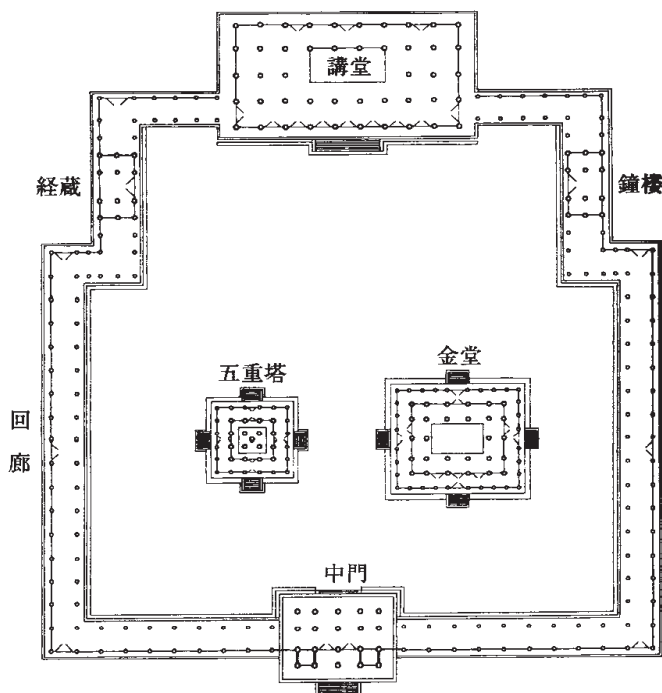


図2 法隆寺西院の伽藍配置

出典：配置現状図 アンリ・ステアリン、世界の建築 下

鈴木博之訳、鹿島出版会

- 治安 3(1023)年 藤原道長、法隆寺に参詣し、夢殿を修理させる

長元 4(1031)年	法隆寺南大門建立：中門から約 25m の位置にあった⇒その入り口前の石段は、七段であった⇒後に九段に変更
治暦 5(1069)年	聖霊会本尊童子形像(七歳像) ⇒上宮王院の太子の一生を表した絵伝が描かれる
延久 3(1071)年	太子の四百五十年忌
保安 2(1121)年	太子の五百年忌：法隆寺東室大房を再建し、南面を聖霊院とし、聖徳太子像他 5 体を安置する
大治元(1126)年	三経院建立⇒太子信仰高揚
保延 4(1138)年	行道面や舞楽面等が作られた⇒聖霊会の内容に著しい変化
応保 3(1163)年	東院鐘楼建立
貞応元(1222)年	舍利殿が建立され、舍利(舍利=釈迦の左目)講式始まる
寛喜 2(1230)年	夢殿大修理⇒太子の法要
弘長元(1261)年	諸院諸房の築地を築造
弘安 6(1283)年	金堂、塔に大修理を加え、塔に避雷針(鎌 4 丁)を打つ⇒受花上の九輪の輪に露盤の角向きに鎌を 4 本付ける⇒雷除け：鬼門－裏鬼門、天門－地門封じ
貞和 4(1348)年	南無仏舍利塔が作られ、舍利殿に安置 東院の舍利殿と絵殿に舍利と七歳像を安置⇒法会?
康安元(1361)年	大地震により法隆寺被災、塔の相輪折れて落下
応永 12(1405)年	聖霊院で聖霊会(お会式)が毎年行われるようになる
永享 10(1438)年	南大門再建(現在の位置)：南大門を通る中軸線と直交する軸線 西方向⇒融通念仏西向山神宮寺、東方向⇒日吉神社
明応 4(1495)年	塔の九輪の擦管作られる
慶長 11(1606)年	豊臣秀頼による慶長大修理終わる
元禄 3(1690)年	聖霊会、東院より西院の大講堂前へ移動⇔多くの人々が参拝⇒講堂前の広場で舞楽:裳・衾袈裟・法服・直垂・白帳箱・装束等新調
元禄 9(1696)年	この頃、桂昌院による法隆寺伽藍大修理⇒塔の露盤を新調?

V. 法隆寺再建論争期

明治 20(1887)年	法隆寺再建、非再建論起こる
明治 44(1911)年	お会式が 1 カ月遅れの 3 月 22 日～24 日の 3 日間になる
大正 10(1921)年	聖徳太子一千三百年忌：聖霊会を旧姿にして再興⇒伎楽面、奈良 1 面、平安以降 16 種 51 面、行道面・追儼面等多数現存。 東院の舍利殿と絵殿から舍利と太子の七歳像を運び出し、東院から西院へと行列(前列：霊が中心、後列：人間が中心)が向かう⇒中門の真中の柱の東側?から舍利が入り、西側?から七歳像が入る⇒大講堂の本尊である薬師如来の前に舍利が右手(彼岸)、七歳像が左手(此岸)に置かれる⇒舞楽(霊の舞)の開始⇒太子礼賛⇒太子の霊(蘇莫者)の出現⇒蘇り⇒太子の徳を称え加護を願う⇒即位の礼⇒講師と

読師は輿と長柄に乗って東院へ帰る／薬師如来の前の舍利と七歳像
は三日間そのまま置かれる→三日目の夕方舍利殿と絵殿に還御

昭和 3(1928)年 法隆寺再建、非再建論激しくなる

昭和 14(1939)年 伝法堂解体の際、当地に斑鳩宮跡を発見。若草伽藍跡を発掘

昭和 16(1941)年 聖徳太子一千三百二十年忌

VI. 法隆寺世界遺産登録期

昭和 24(1949)年 法隆寺金堂より失火、壁画損傷する

昭和 29(1954)年 法隆寺金堂修理完了して昭和大修理終わる

昭和 42(1967)年 法隆寺の境内が歴史的特別保存地区に指定される

昭和 46(1971)年 聖徳太子一千三百五十年忌⇒大会式が 10 年に 1 回開催となる

昭和 56(1981)年 法隆寺「昭和資材帳」づくり始まる

平成 5(1993)年 法隆寺地域の仏教建築群が日本初の世界文化遺産となる

平成 16(2004)年 奈良文化財研究所が建築部材に関するデータ発表

4. 法隆寺の特徴についての整理

法隆寺は、再建・非再建論争が中心に議論されて来たが、若草伽藍の発掘によってそれは終息した。しかしながら、法隆寺様式とされる南大門から中門を入ると回廊で囲まれた中に東に金堂、西に五重塔があり、講堂が奥の正面にあるという形は、法隆寺の 2/3 の大きさで造られた法輪寺以外には見られない。何故、金堂が東にある西院の伽藍配置が生まれたのか、何故、金堂と塔には裳階が設けられたのか、何故、中門の真中に柱が建てられているのか等不明とされているが、以下法隆寺の特徴について列举し、簡単に解説を行なって見ることにしたい。

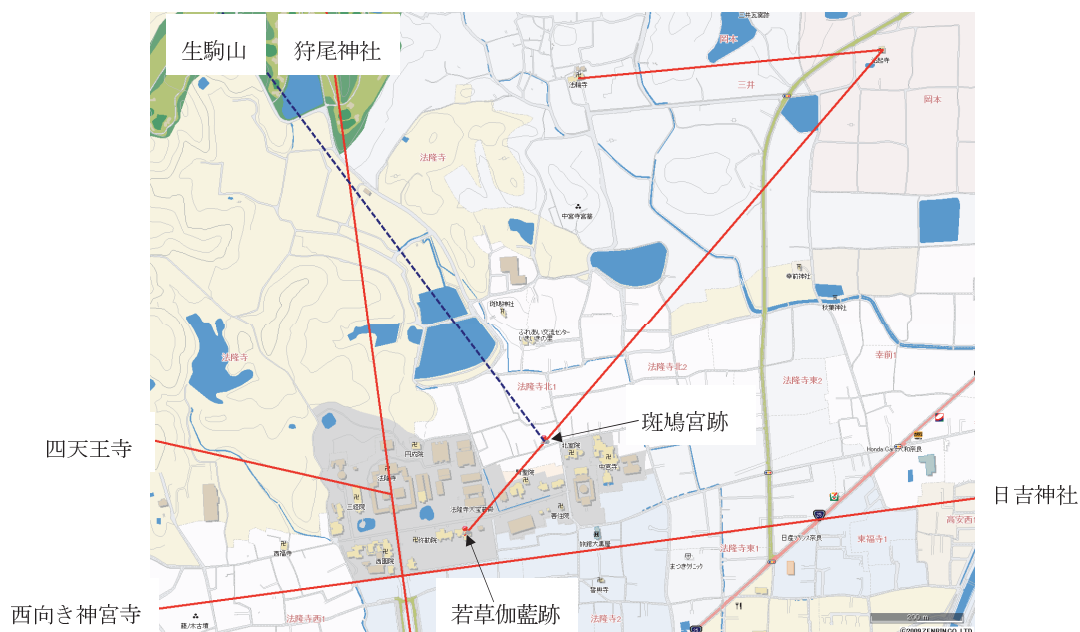


図 3 藤/木古墳・法隆寺・中宮寺・法輪寺・法起寺等の位置

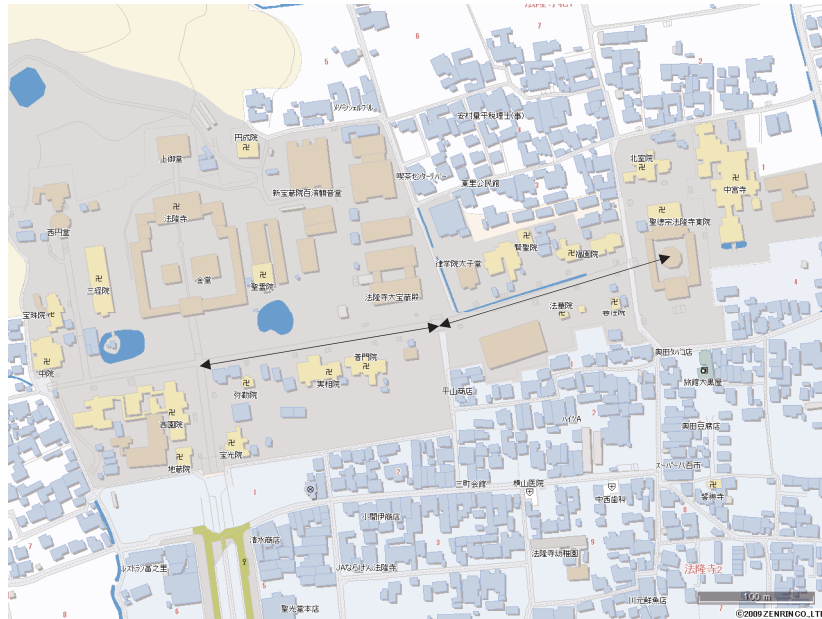


図4 法隆寺西院と東院の伽藍配置(矢印間 216m)

4-1 斑鳩宮と若草伽藍

若草伽藍と斑鳩宮と法起寺は鬼門-裏鬼門の三点一直線：悪霊封じの配置形態か？

若草伽藍と斑鳩宮⇒何れも生駒山向き：当時は三輪山の如く山を崇拝する信仰あり

4-2 東院伽藍と西院伽藍

東院の夢殿(八角堂)は地、西院は天=浄土で、天地合一形を成している。つまり、法隆寺は、前方後円墳(⇒「円=○=墳墓=天」+「方=□=継ぎの儀式的場所=地」)をモデルとし、新たに仏教思想を取り入れ天地合一を祈願する舞台として形成されたのではないか？

4-3 法起寺と法輪寺

陰と陽、法起寺と法輪寺は 685m 離れて東西に並ぶ⇒輪廻転生を祈願して造られた形か？

法起寺は西に金堂、東に三重塔⇒川原寺様式：この世の伽藍配置

法輪寺は西に三重塔、東に金堂⇒法隆寺様式：あの世の伽藍配置



写真1 法起寺の正面(塔が東)



写真2 法輪寺の正面(塔が西)

4-4 法隆寺と中宮寺

法隆寺(僧寺)と中宮寺(尼寺)⇒陰と陽の対で構成された

若草伽藍と創建中宮寺(現中宮寺の東約 400m)⇒何れも四天王寺様式、生駒山向き

4-5 金堂と塔の裳階

法会の際に右回りしながら読経する場所を奈良時代に増築?⇒高松塚古墳やキトラ古墳では二段で築造されている。これは石室の周りを廻って儀礼を行う舞台であったものと推察される。当初は露天の金堂と塔の二段の基壇上であつたが、法隆寺が完成した落成法要と太子の命日(3月22日)の法要を建築内部で取り行うため裳階を後補したと推察される。

4-6 夢殿と金堂と塔の二重基壇

高松塚古墳は二段式。キトラ古墳は二段築成作りでその天井には28宿が描かれている。

西院の金堂と塔は裳階が後補されているが、東院の夢殿には無い。これは現在も大勢の参拝者がその前の八段の石段から二重基壇の上に登り、左周りに拝観する形となっている。尚、東院の夢殿で行われる修正会の際、内部で行道は右回りしている。西院の金堂と塔はそれぞれ4方向に八段の石段があり、上り下りしながら拝む形となっている。



写真3 五重塔の裳階と二重基壇と階段



写真4 金堂の裳階と二重基壇と階段



写真5 夢殿(八角堂)の二重基壇



写真6 夢殿(八角堂)の屋根の軒丸瓦28列

4-7 法隆寺と法起寺と法輪寺の塔の八角形の心柱

この3寺の塔は斑鳩三塔として親しまれているが、それらの心柱は何れも八角形である。

塔は、九輪と八角形の心柱を通じて天女が降臨するとアンテナである。中国の秦の始皇帝以来、九は○(輪=円)=天を示し、八は□(条坊街区=地)=地を示し、天地合一形を成す。

4-8 中門の柱配置

ニュージーランドのマオリ族のマラエ(神社兼集会所)の「正面にある窓(右側)は霊の入口で、鳥居形の門(左側)は人の入口」と説明されている。聖霊会の際、中門の正面にある大講堂の薬師如来の前の右に舍利塔(霊)、左に太子の七歳像(人)が安置され、法会が行われている。この大講堂に東院から舍利塔と七歳像を移して行うようになったのは元禄3(1690)年であるから、聖霊会を取り行うために中門の入口の中央に柱を設けた訳ではない。中門を入ると右(西)に金堂、左(東)に塔が建っているが、回廊が凸形にされる正暦元(990)年以前は□形の回廊から金堂と塔の裳階の内部で行われる儀式(秘儀)を大勢の人が遠巻きで見っていた。第62回の正倉院展には19年振りに螺鈿紫檀五絃琵琶が出品されたが、それを見学するのに長蛇の列が出来た。その様子は、先ず行列の最後尾に並び、右回りでガラスケースの中の琵琶を見、約1時間後に出口から出る形であった。これと同じように太子信仰の篤い人々が大量法会に集まった際、左側の入口から回廊内(仏の世界)に入り、回廊を右回りに廻って拝観し、右側の出口から出る(人間の世界へ戻る)形が想定され、造られたものと推察される。

尚、東京駅(旧東京中央停車場、辰野金吾設計、大正3(1914)年竣工)の南口と北口は八角形のホールで、その天井はドーム形で丸となり、天地合一形となっている。当初南口から入り北口から出る(区間長:198m)形で、中央口は天皇が地方に行幸に出られる時にのみ使われた。また、国会議事堂は辰野金吾の提唱でコンペで決まったが、その中央ホールは法隆寺の五重塔が入る高さに吉武東里等によって決められ、昭和11(1936)年に完成した。何故、法隆寺がモデルとされたのか、興味ある事項である。



写真7 中門の中央の柱と九段にされた石段 写真8 塔の九輪に付けられた4本の鎌
4-9 南大門と中門の前の九段の石段

金堂の壁画を見ると、釈迦の天蓋の房の数は9本描かれており、聖徳太子が皇帝(=天皇)と見做されていたものと推察される。大講堂を見ると、最初8間の食堂であった建物を取り壊し、6間の講堂を建てたが、元禄時代に9間に改造している。また、最初の南大門と中門の前の石段は、元々は7段であったが、太子信仰が高揚する中で9段に改造している。

4-10 五重塔の九輪に4本の鎌

現在は下り棟の先端に鬼瓦が載っているが当初は鬼では無かった。鎌は雷避けとされているが、地震・雷・台風などの悪霊退散の呪いと推察される。露盤に葵紋が見える。

5. 考察

文献に示した法隆寺に関する書物を一瞥すると、若干の年のズレや現在の実態を当初の形に復元せずにそのまま記述していたり、方位は記述と実態が合わなかったり等が見られる。また、年表はそれぞれによって観点が異なるため、重要事項と考えられるものでも抜け落ちが見られる。物(文献や建物、仏像等)を通じての物的証拠に基づいての記述はかなり過去に遡り詳細に行われているが、建物の使われ方や法会等の行われ方については、殆ど記述が見られない。聖霊会の行われ方については、梅原猛氏による昭和46年4月2日に行われた記述があるが、中門を太子像と舍利がどちらの口から入ったか、また3日後に東院に変える時はどうであったかには言及していない。法隆寺の金堂と五重塔、大講堂、回廊等について説明していたサムイ姿の案内人に尋ねて見ると、建物の成立については詳しいが、その入り方については知らないとのことであった。平成23年に大会式が10年振りに行われるので、その時に観察することでその決着を付けることが可能となる。しかしながら、当初の出入りの形と変わっている可能性もあるので、それだけで判断することは出来ない。「物」を通してその形態や種類等から過去の「生活」を予想することは可能であるが、真実は分からない。しかしながら、そのような限界があるとしても大会式が行われる3日間の法会や伎楽等を観察することで、過去の法会の行われ方を探り、その空間でどのようなドラマが繰り広げられていたのかを追求することが可能となる。そのような追求の仕方は新たな視点を導入するものであり、真実を探るためには必須と考えられる。

6. まとめ

1400年もの歴史を誇る法隆寺の建立やその後の改築、改造の意味ないし目的を探る方法は、文献や痕跡等の「物」を通じて見るだけでは真実に迫ることは難しい。当時のそれらの「物」の使われ方等を見ることを通じて、どのような必要があったためにそのような「物」が造られたのかを追求して行くことが大切である。

法隆寺の境内と建物は舞台と大道具・小道具である。俳優と裏方は当時の僧侶達である。しかしながら、演劇が成り立つためには監督が必要であり、それに先だってシナリオライターが必要である。そして、その演劇が悲劇であろうと喜劇であろうと観客を感動させるためにはそれなりの大義や琴線に触れる真実や理念、哲学が必要である。

法隆寺は太子信仰に裏付けられて発展してきたものである。従って、東院と西院の建物やそこに安置されている仏像等を通して十七条憲法に代表される太子の理想について深く理解し解釈することが、真実を解明するために求められると言えよう。

7. あとがき

昭和 53 年に名田庄村(現小浜市)の若狭神宮寺に行ったところ、案内に出た僧侶が「この寺は室町時代に天の邪鬼な大工が総て他と違った造りとした」と言う説明を聞き驚いた。つまり、「現在国の重要文化財に指定されており、東大寺の初代の僧正を輩出している大きな伽藍を構えたお寺の再建に当たり、そのようなことを一人の大工が出来る筈が無い」と直感した。この寺は奈良東大寺二月堂にお水送りをする鶴ノ瀬の近くに位置し真北に位置するために、そのような建て方がされたものと考えられる。

今回、法隆寺に関する文献を読み、現地を訪れることで大変勉強になった。しかしながら、一つ一つ分からないことが多く、法隆寺の真実の解明には程遠いものとなってしまった。「物」については詳細なデータが見られるが、それを通してそれは何故造られ、どのように使われたのか、その舞台では何が演じられ、その演劇では何を伝えたいと考えて演技が行われたのか、そのシナリオは誰がどのような目的で書かれたのか等、今後益々追及して行かないと過去の真実を知ることは難しい。平成 23(2011)年の春に 10 年に 1 回行われる大会式(聖霊会)が東院から西院に太子像と舎利が移され、中門を潜って大講堂で 3 日間盛大に行われるので、それについて観察し、更に考察を深めて行きたい。

謝辞

これまで法隆寺に限らず北海道から九州にかけて数多くの神社仏閣を訪れ、見学し、色々な話を多くの人から聞くことができた。特に祭りの見学の際には色々な人から様々な話を聞くことが出来た。一人一人の名前は記さないが、ここに謝意を表し、終りとしたい。

文献

- [1]服部勝吉：法隆寺の伽藍配置法に就いて；新建築，1-3 ， 46-53・16-29・14-23，1924, 8-11.
- [2]法隆寺, 原色日本の美術 2, (株)小学館, pp. 1-232 , 1966
- [3]梅原 猛：隠された十字架—法隆寺論, 新潮文庫う 51, (株)新潮社, pp. 1-602, 1972.
- [4]石田茂作: 法隆寺雑記帳, pp. 1-294, 1991.
- [5]高田良信：法隆寺の四季 行事と儀式;法隆寺, 125-274, 1992, 10.
- [6]飛鳥・白鳳の美術, 法隆寺と斑鳩の寺, 日本美術全集第 2 巻, (株)学習研究社, pp. 1-229 , 1991.
- [7]国宝法隆寺展, 法隆寺昭和資材帳調査完成記念, NHK, pp. 1-314 , 1994
- [8]千田 稔, 金子裕之：飛鳥・藤原京の謎を探る；文英堂, pp. 1-349, 2000.
- [9]稲垣晋也監修：法輪寺出土古瓦展；法輪寺, 2002, 11.
- [10]武澤秀一：法隆寺の謎を解く，ちくま新書 601, 筑摩書房, pp. 1-280, 2006.
- [11]法隆寺: 古寺を巡る;1, 小学館, 1-41, 2007, 2.
- [12] 法隆寺: 小学館; 1-135, 2009, 4.